

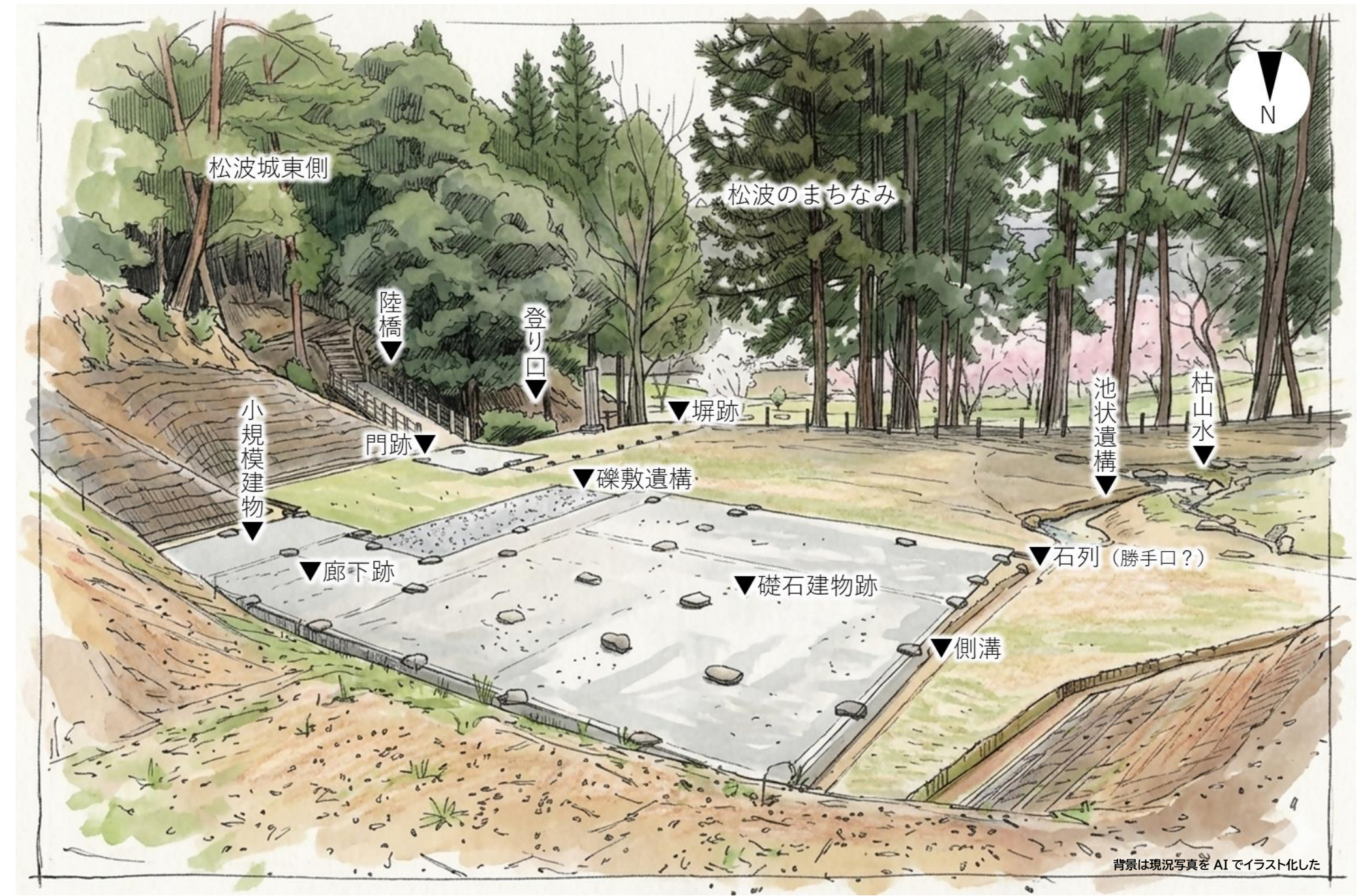
旧松波城庭園

松波氏の城館に所在する庭園遺構で、景石を結ぶように扁平な円礫を小端立てに敷き詰め、水流を表現した枯山水の手法は他に類例を見ない傑出したものである。当地への優れた庭園文化の伝播及び独特の意匠・工法の定着を示す物証であり、庭園史上の価値が高いことから、平成24年(2012)1月24日に名勝指定された。

能登町教育委員会では、名勝指定後に保存管理計画(平成25年)及び保存整備基本計画(平成29年)を策定するとともに、平成25年度から令和3年度にかけて保存整備実施に必要な知見を得るための発掘調査及び保存科学調査等を実施した。その結果、昭和50年代に確認されていた礎石建ちの主殿と考えられる建物跡等がさらに広がりを見せることが確認され、枯山水との空間構成がより鮮明となった。また従来、庭園の存続年代は15世紀後半から16世紀(戦国～安土桃山時代)にかけて想定されてきたが、出土遺物の検討等から15世紀前半(室町時代)には建物が焼失して廃絶していたことが確認され、遡ることが明らかとなった。

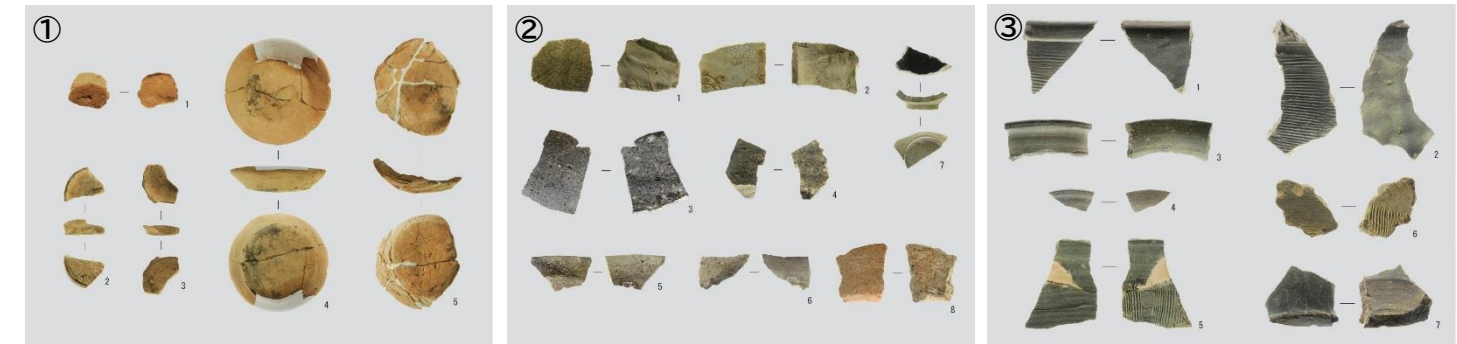
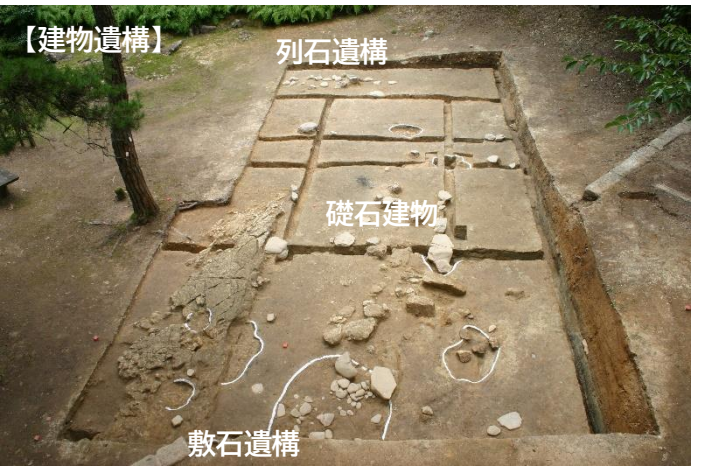
主殿と考えられる建物は南東側を正面とし、北東側に延びる廊下によって小規模な建物と接する。一連の建物は斜面地を切り込んで平坦地を造成して建てられており、小規模な建物の正面には門を設けている。門の南西には板塀の遺構が確認されており、東側から訪れる人びとの視線はこの板塀により遮られて造作された庭園を伺うことはできない。北に向かって門をくぐって小規模な建物に上がり、廊下を経て南西の主殿に至って初めて南東の見晴らしとその右手前方に傑出した枯山水の意匠に臨むという巧みな観賞の仕組みを伺うことができる。主殿からは、松波氏の菩提寺となった満福寺(万福寺)や、松波氏が造営した八幡宮(松波神社)が所在する低い丘陵を眺める。

保存整備に伴う発掘調査成果等によって庭園の主な区域を成す平坦地の具体的な空間構成が確認され、その正面性から南側に下る斜面地の重要性とともに、平坦地に広がる遺構や地勢の保存の観点から東側に下る斜面地保全の必要性も明らかとなったため、令和5年に指定地域が追加された。



保存と公開について

本庭園には、園池遺構(枯山水遺構、池状遺構、泥岩貼付遺構)と建物遺構(礎石建物、敷石状遺構、列石)など貴重な遺構が残されている。発掘庭園の公開にあたり、環境変化による劣化を懸念し、気象観測や土壌調査などを実施した。その結果、環境が比較的安定しており、石材も急激には劣化しないことが確認された。これらの調査成果に基づき、遺構は露出展示を基本とし、困難な場合は複製展示を行うことにした。



出土遺物(①土師器 ②瀬戸焼、信楽焼、越前焼、中国製天目、瓦質土器 ③珠洲焼)

出土遺物について

①土師器は酒宴等における食器利用、②瀬戸焼などは飲食や調理での利用や、茶葉を入れる茶壺の可能性が指摘されており、酒宴や茶会が開催されていた可能性がある。③珠洲焼は日常雑器で、近く行延窯で生産され、窯の経営に松波氏が関与していた可能性が指摘されている。

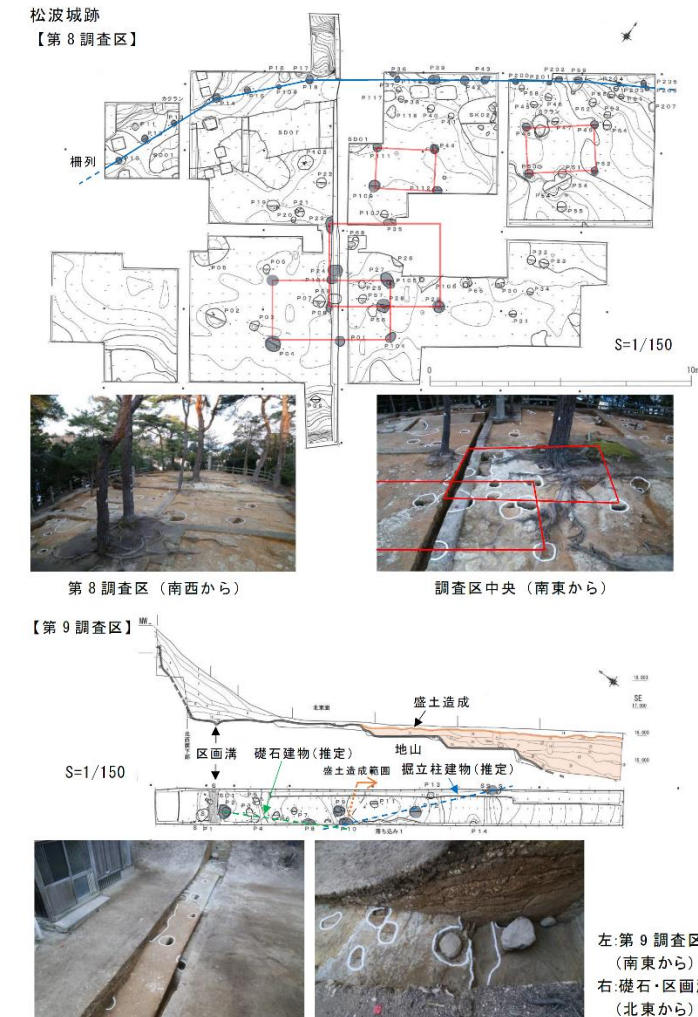


松波城の歴史と遺構

松波城は松波市街地の西に位置し、日本海(飯田湾)に注ぐ松波川左岸の標高約 30 ㍎の丘陵に築造された、14～16 世紀の中世山城である。能登国最大の荘園であった珠洲郡若山荘の有力武士である松波氏の居城である。

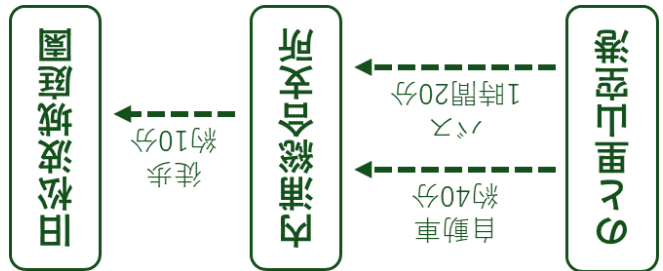
松波城が機能していた中世と呼ばれる時代には、松波周辺は若山荘と呼ばれる荘園に属していた。城主とされる松波氏は、年貢の徴収などを荘園領主にかわって代行する有力者(豪族)だったと考えられる。同氏の一族は、荘園領主である公家の日野家に仕えていたようで、京都との交流があったことがわかっている。城跡で見つかった枯山水の庭園は、京都と能登の交流を示すものなのかもしれない。

奥能登生え抜きの有族である松波氏は若山荘の領主である京都の公家日野家との関係から、独自の勢力を保ったようだ。しかし、日野家の衰退に伴って能登守護畠山氏の影響力が強まり、同氏から松波城最後の城主とされる義親が養子として迎えられたと考えられている。これによって、奥能登で独自の勢力を保っていた松波氏は、畠山氏の有力被官(家臣)に列したのである。



注意 足元の悪い場所があります。また危害を加える可能性のある小動物などが現れる可能性があります。十分注意して歩いてください。

発行
能登町教育委員会
〒927-0492 石川県能登町字出津1字 50 番地1
TEL 0768-62-8537 FAX 0768-62-8538
真脇遺跡縄文館
〒927-0562 石川県鳳珠郡能登町字真脇 48-100
TEL 0768-62-4800 FAX 0768-62-4172



所在地



松波城最後の城主 松波(畠山)義親
天正4年(1576)の上杉謙信による能登侵攻では松波城に籠城し、落城に際して自害してはたという。

城域は、その一部が昭和 30 年代後半から 50 年代に松波城址公園として整備された。また、国鉄能登線の敷設により大きく削平された部分もある。そのため、城の遺構は、大きく地形の変更があった。しかし、日本海への眺望が開けた東側の先端付近は、曲輪や土塁、堀切などが良好な状態で残されている。発掘調査により、曲輪を囲むように設置された柵や、物見櫓と考えられる掘立柱建物、礎石建物が存在したことがあきらかになっている。東側の曲輪 7 より西側は、公園整備の影響もあってか明確な遺構は確認できない。